

～安心して暮らせる地域社会をめざして～

KSK じんかれんニュース

NO.76 2024 年 12 月号



スマホの QR コードをかざすと
「じんかれんホームページ」を
読み取ることができます。

発行人 / 神奈川県障害者定期刊行物協会
〒222-0035 神奈川県横浜市港北区烏山町 1752 番地
障害者スポーツ文化センター横浜ホール 3 階
横浜市車椅子の会内

編集人 / NPO 法人じんかれん
(神奈川県精神保健福祉家族会連合会)
〒233-0006 横浜市港南区芹が谷 2-5-2
神奈川県精神保健福祉センター内
TEL 045-821-8796
FAX 045-821-8469
E-mail: jinkaren@forest.ocn.ne.jp
URL: <https://jinkaren.net/>

県立やまゆり園事件から 8 年、令和 6 年 9 月 20 日の県議会代表質問において黒岩知事が答弁

神奈川県 障害サービス課作成「答弁要旨記録」より)

本会議 一般質問 質問者 市川 よし子議員 (会派 立憲主党・かながわクラブ)

《質問要旨》

県立中井やまゆり園の改革に向けた取組の状況について 現場の実態を知るために、私はアドバイザーの方々とは意見交換をしたが、改革の現場で職員の協力が得られていないのではないかと、改革は進んでいないのではないかと不安に思う結果であった。過去にさかのぼっての徹底的な検証が必要と考える。そこで、中井やまゆり園の改革を進めるにあたっての現在の課題認識と、今後、どのように改革を進めていくのか、所見を伺う。

《知事答弁》

次に、県立中井やまゆり園の改革に向けた取組の状況についてお尋ねがありました。中井やまゆり園では、令和 5 年 7 月に策定したアクションプランに基づき、「当事者目線の障害福祉」の実践を進めてきました。かつて強い行動障害を理由に、長時間、居室に閉じ込められていた利用者が、活動機会を得る中で、例えば、地域での清掃活動に参加し、笑顔が増えるなど、一人ひとりの可能性が広がり始めています。一方、現場では、業務マニュアルを優先した職員目線の支援が根深く残っており、利用者一人ひとりのこれまでの人生を振り返り、共感を深め、寄り添うという、当事者目線に立った支援が深まったとは、まだまだ言える状況ではありません。また、これまでの本庁による職員指導や研修等にも課題があったと考えています。なぜこうした状況に陥ってしまったのか、これまでの支援のあり方や職員教育、組織体制などの課題を徹底的に検証し、改善に向け直ちに対応していきます。これまで改革を進めてきたにもかかわらず、いまだその理念が浸透していないことを真摯に受け止め、職員一人ひとりが当事者目線の支援を徹底できるよう、解決に向けて全力を挙げてまいります。

《再質問》

先ほど知事より答弁いただいたが、現場は憂慮すべき状況と言わざるをえないと思っている。しかし、中井やまゆり園の改革なくして独法化はありえない。改革を断行していくためには、本庁も現場も一丸となり、ことにあたる必要があると思うが具体的にどうしていくのか。今一度改めて知事に確認いたします。

《知事答弁》

中井やまゆり園の改革に向けた取組についてお尋ねがありました。私は、津久井やまゆり園での悲惨な事件を二度と起こしてはいけないとの強い思いで、ずっとやってまいりました。議会の皆様とも「ともに生きる社会かながわ憲章」をとりまとめ、当事者目線の障害福祉推進条例を一緒にやってきて、それを実践していこうという段階に入ってきて、なかなかいい感じに来ているなという報告を受けていました。しかし、しっかり見てみると、とんでもない。これだけ改革を進めてきたにもかかわらず、当事者目線の支援、全然徹底されていないと、こういう生々しい現実を見ました。あまりに根の深い問題、愕然とする思いであります。

しかし、我々はここで立ち止まるわけにはいかないのです。前に進んでいかなきゃいけない。

また、新たに浮き彫りになった利用者の皆さんの命に関わるような深刻な問題、こういったものも出てきた。強い危機感を抱いています。

なぜこうした状況に陥ってしまったのか、これまでの支援のあり方、職員教育、組織体制などの課題を、現場任せにせず、本庁と現場が一体となって徹底的に検証するよう指示をしました。

この問題を根本から解決する。この問題、おそらく中井やまゆり園だけの問題ではないと思います。全国の障害者福祉施設の実態は、おそらくそう変わらないのではないかと、そう思っています。

だからこそ、中井やまゆり園を、徹底的に改革を進めるということによって、日本全体の障害福祉を変えていく、そんな強い決意で望んでいきたいと思っています。

《要望》

中井やまゆり園について、この質問をするにあたり、「月」という映画を見た。津久井やまゆり園事件を想定させるような設定の小説がベースになった話だが、この問題というのは、私たち一人ひとりが理想を持っていても、現場でどうなっていくのだろうか、いろんな深いことを考えさせられる映画であった。今、私も質問しながら、本当に深い問題と思う。

根が深い問題だということも踏まえた上で、皆が一丸となって断行していかなきゃいけないことだと改めて思った。今は、憂慮すべき状況だが、本庁も現場職員も一丸となること、これが大切だと思う。答弁でもありましたが、不退転の決意で、独法化が控えているが、改革を断行していた だくよう、心から強く求めたい。



第 16 回全国精神保健福祉家族会 みんなねっと北海道大会
対話を家族のものに 孤立から支援の輪の中へ
～真のつながりを求めて

オンライン視聴報告

2024・10月12日に行われた全大会をライブでオンライン視聴しました。会場、オンライン視聴含めて600名と活気ある大会でした。

開会に先立ち精神科医 香山リカさんによる大会開催の意義の説明のあと、主催者挨拶でみんなねっと岡田久実子理事長は共有したい情報として①交通運賃割引②優先保護法の誤りの説明があり、みんなねっと、として真の共生社会のあり方を考えていきたいとの挨拶があった。

本大会の実行委員長から3つの目標(①北海道らしさを押し出す②全国ラベルの大会を意識③当事者家族を励ます)を持って取り組んで来たことを披露。

北海道知事、札幌市長よりの祝辞の代読の後、お祝いのメッセージと祝電の紹介があった。

壇上者退席のあと、オンラインにより20分間、厚生労働省により、「精神科病院における虐待防止措置」や通報義務等を中心とした精神保健福祉法の改正と、最近の行政の動向の話があった。

基調講演は浦河べてるの家理事長・北海道医療大学特任教授 向谷地生良氏により

『自分自身とともに』～リソース(資源)としての当事者家族の経験の可能性～について

べてるの家の理念、活動状況、対話の持つ力について熱く語られた。「3度の飯よりミーティング」と言われるくらい「対話」を大事にし、「当事者の力」「仲間の力」を大切に日々取り組んでいる。また寸劇をまじえた講演やオンライン情報交換会を行い、北海道の支援者同志が、支え合い、課題解決に向けて官民一体で取り組んでいる。

【大会資料より抜粋】

『今回の大会のメインテーマは「対話」です。昨今、さまざまな領域で、この「対話」を重視する流れが起きています。メンタルヘルス領域においても、対話実践が関心を呼んでいます。2013年にフィンランドから紹介された対話実践であるオープンダイアログが契機となり、北海道浦河ではじまった(2001)当事者研究が注目されるようになりました。そこに共通しているのが、専門家主導、薬物療法第一主義から、それぞれが対等に協力し合い、薬一辺倒ではなく、本人の主観的なニーズや理解を尊重しつつ、できるだけ地域の中で、当事者や家族の経験に地域が学び、それを活かしながら、地域のネットワークを豊かにしていくというビジョンです。そのための考え方の基盤に「対話」を置こうということです。それは、単なる助け合いや理解の促進という心情的なものではなく、私たちの社会を支える「民主的であること」の理念と、お互いの違いを越えた「意味の創出と共有」によって実現する者です。困難を生き抜いた当事者と家族の経験は、それを支える大切なリソース(資源)なのです』

午後は淑徳大学准教授 伊藤千尋氏による「家族会の可能性～変革は小さな声から～」と題した特別講演でした。精神保健福祉士、社会福祉士でもある、これまで家族会活動を支えてこられた、伊藤千尋氏に家族会が抱える高齢化問題などをこれからの課題としてその可能性についてお話いただきました。家族会の在り方について、共に考える機会を持ちました。

【大会資料より】

1. 精神障害者家族をどうとらえるか

ケアラーのとらえ方として、よく知られているものにケアラーの 4 つのモデル

- ① 社会資源としてのケアラー：家族が本人をケアすることを当然ととらえるモデル
- ② 協働者としてのケアラー：本人の回復のために家族を支援者と協働する人としてとらえるモデル
- ③ クライアントとしてのケアラー：本人だけでなく家族をもクライアント(援助の対象者)ととらえるモデル
- ④ ケアラーという枠を超えて、共に生きる者としてとらえるモデルがあります。

この 4 つのモデルのうち、家族をどのようにとらえているかによって、家族会の目指すものが変わってくるのではないのでしょうか。私は、家族会はどのモデルも大切にできる場所だからこそ、家族のリカバリーに欠かせないのではないかと考えています。

ケアラーとは：日本ケアラー連盟の定義です。こころやからだに不調のある人の「介護」「看病」「療育」「世話」「気づかい」など、ケアに必要な家族や近親者、友人、知人などを無償でケアする人のことです。現在の日本の介護者の約 7 割は家族が担っています。

クライアントとは：もともとはカウンセラーに相談を依頼する依頼者という意味です。心理療法や福祉の分野ではサービスを受ける利用者を「クライアント」と呼ぶことが多いです。クライアントとクライエントは同じ英語のカタカナ表記ですが、業界や職種によって使い分けられます。心理学・福祉分野ではクライエント、ビジネス分野ではクライアントを使います。

2. 全国家族会調査から見えてきたこと

みんなねっとが実施した全国家族会調査(2012)では、全国各地の家族会が停滞・衰退状況にあることが明らかになっています。この調査では「衰退している・休会状態にある」という家族会が約 2 割存在する一方で、「安定している・発展している」と回答している家族会も 3 割以上ありました。調査に回答できていない家族会もあり、調査から 10 年経過しているため、決して楽観はできませんがそれでも発展傾向にある家族会がありました。

少し見方を変えてみると、家族会は、設立間もない時期から高齢化や停滞を指摘されていたのにもかかわらず、60 年以上続いているとも言えるのではないのでしょうか。

家族会の「わかちあい」は、時代を越えても変わらず、家族を支え続けてきました。

当日は、これまでの家族を対象とした調査や月刊みんなねっとでの家族の声を振り返りながら、”家族会は家族のためにある“ことを確認したいと思います。

3. 変革は小さな声から ～障害の社会モデルで考える～

近年、当事者運動から生まれた「障害の社会モデル」が知られるようになって来ました。「障害の社会モデル」とは、障害者が直面する困難や生きづらさは、社会や環境に起因しているのだから、社会が責任をもってバリア(障壁)を取り除かなければならないという考え方で、障害者権利条約のベースになっているものです。

家族会で他の家族の声を聞くことで、「自分だけが苦しいと思っていたけれど、みんなに共通することなのかもしれない」「生きづらいのは自分のせいではなく、社会のあり方に問題があるのかもしれない」と気づく。そのような経験をされたご家族も多いのではないのでしょうか。声は、話す相手、聞いてくれる相手がいるから生まれます。何かにつながらないと、声は消えてしまいます。小さな声に共鳴し、社会の構造に気づく、そして社会にメッセージを届けることができるのが家族会かもしれません。

全体会は みんなねっと理事長 岡田久実子氏の活動報告のあと

次回の開催地の紹介 京都より大会宣言があった。令和 7 年 9 月 6 日(土)
分科会は、会場参加者のみ、となり後日アーカイブ(録画)との報告があった。

(まとめ:三畠)

2024 年度 精神障害者家族相談員養成事業

NPO 法人じんかれん 研修会 報告

2024.10.31 於て 県民センター

【講演】 「オープンダイアログの可能性について」 講師 鍼灸師・精神科医 森川すいめい氏

精神科医の森川すいめいさん(50)は、被災者や困窮者の支援を長く続け、近年は薬物中心でなく複数人の対話で患者の回復を図る「オープンダイアログ」の実践で知られます。過酷な家庭環境で育ち、いじめや不登校、うつも経験しました。「一個人の事例に過ぎないのですが何か役に立つ部分があるならば」と体験や聴いてもらう大切さを語ってくれました。



精神科医とは思えぬラフな格好、笑顔を絶やさず、同じ目線で話す森川すいめいさんは、まさしくオープンダイアログという対話を重ねる方法で精神的な問題を抱える人々を回復に導くという体験や聴いてもらう大切さを語ってくれました。

対話を通じて相手の心を癒やしていくフィンランド発祥の「オープンダイアログ」を実践し、精神的な問題を抱える多くの人々を回復へと導いてきた精神科医の森川すいめい氏。しかし、現在に至るまでには、父の家庭内暴力や愛する母の死、大震災での苦悩など、壮絶な体験があったという。人生の艱難辛苦、

葛藤と向き合っていく中で、森川氏が辿り着いた自分らしく生きる心の持ち方、幸福な社会を実現するには誰もが抑圧されることなく、最後まで希望を持って生きることができるはずで、どんな小さな声にもしっかり耳を傾けて、対話を重ねていける優しい国や社会であれば、誰もが抑圧されることなく、最後まで希望を持って生きるはずとの考えから対話を通じて他者の心をケアしていく「オープンダイアログ」を実践し、精神的な困難を抱える人々を回復に導いてきています。

従来の「心の病い」による治療は「クローズ」と言われる精神科医による、短時間による上から目線による薬と説得が主流であるが、「オープン」とは、クライアントである本人やご家族などの関係者に対して開かれているという意味なんです。その人のいないところで勝手に物事が決まらないようになっています。

言葉だけではなく、目線、触れる、権力差をなくす、対等の立場で対話する。答えを出さなくて良い手法です。思い込みで決めたりせず、一方的に質問することもなく、何があったのか、何に困っていてどんな気持ちなのか、望むことは何か、本人が語りたい内容に耳を傾けます。家族内で話すと、互いの言葉に強く反応して聴けない場合があります。そこに複数の第三者が入ると、本音が伝えやすくなります。オープンダイアログは、対話を通して意見を一致させることを目指すものではなく、参加者それぞれの考えや感じ方の多様性を重視します。人と異なる意見でもすべての意見を傾聴し、尊重することが大切です。オープンダイアログにおける対話とは、クライアントを説得したり、アドバイスを与えたりというものではありません。対話をする事自体を目的としています。講演会の中で、隣に座った初対面の方と 5 分間、最近の事について一方的に「話す」「聴く」を行い、対話の難しさを体験しました。

(三富)

みんなねっと 2024 年度関東ブロック大会第 50 回県民の集い IN 神奈川・川崎 報告

1、日 時： 令和 6 (2024) 年 11 月 14 日 (木) 10:30~16:30

2、会 場： 川崎市高津市民館 12 階 大ホール

3、参加者：332 名 家族、当事者、福祉機関・一般
・家族 234 (じんかれん・あやめ会以外…82)。福祉関係の参加が例年に比べて多かった。

4、テーマ：「精神疾患の当事者への訪問支援・対応について
～家族も当事者もそれぞれが穏やかな生活の実現を願って～」

5、基調講演「当事者とご家族にとっての精神科訪問看護の役割・可能性」

聖路加国際大学大学院看護研究科 教授 瀬戸屋希 氏

- ① 当事者の地域生活を支える精神科に特化した訪問看護は、拡がりを見せているが、利用者はまだまだ少ないのが現状である。家族も「聞いたことがある」程度で内容について知っている人は多くない。



② 既に利用している人も、その効果について悩んでいる人もいる。

- ・ ①②の現状に対して、精神科訪問看護のしくみ、現状について、理解につながる講演になった。
- ・ 訪問看護が本人のストレングスに注目し、夢や希望につなげていくことは心強く感じた。
- ・ 当事者だけでなく、家族への関わりを持つことで、回復へ相乗効果があると思えた。
- ・ サービス利用者とサービス提供者が対等な立場で取り組むコ・プロダクションの考えもあり、地域生活の一つの大きな柱になると感じた。
- ・ 参加した医療・福祉関係者からも改めて学べたとの声が寄せられた。
- ・ 参加者からは「穏やかな話し方は聞き取りやすく、わかりやすかった」との感想が多かった。

6、パネルディスカッション

コーディネーター…川崎市総合リハビリテーション推進センター所長 竹島正氏

パネリスト…基調講演講師 瀬戸屋希氏、SST リーダー 高森信子氏、

みのり訪問看護ステーション高津所長 小川未生氏、川崎あやめ会理事長 長加部賢一氏

- ・ 前半では 3 名のパネリストから発表が行われた。高森氏からは、傷つきやすい本人の心に寄り添う支援の大切さ、小川氏からは家族を含めた支援の実例、長加部氏からは家族会に寄せられた訪問看護を受けた当事者の変化や家族の様子が伝えられた。
- ・ 後半は瀬戸屋氏も加わり、会場からの質問に答えていく時間を長くとり、テーマの「穏やかな生活」につながる支援について、登壇者で議論を深めていった。高森氏の当事者に寄り添う支援の大切さは参加家族の心に響き、家庭での実践につながっていくだろう。

小川所長からたくさんの実践例を聞いて参考になった。本人が拒否して、会うことも難しい例もあるが、粘り強い対応で信頼関係を築いている例もあり、医療拒否にも対応できる可能性を感じた。長加部氏の精神科医療の難しさを認めながらも、ゆっくりであっても変わっていきける。家族も声をあげ続けて、地域生活が穏やかなものになるように一歩ずつ進んで行きたい。精神科訪問看護が当事者・家族の生活を支える一つとして期待する。大会を締めくくるのに相応しい言葉だと思った。この大会で支援者と家族が同じ場で集えたことの意味は大きいと思う。

7、運営上の反省（アンケート内容も含む）

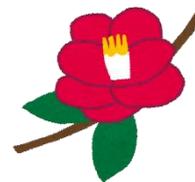
- ・ 基調講演で印刷資料にない画面があったので、全部印刷して欲しいとの意見があった・連絡が不十分で、パネリストの資料が当日印刷になってしまったり、パネルディスカッションの舞台配置が混乱した・ミニコンサートの観客が少なく、プログラムの中に入れる方が良かったのではないかと感想があった・参加者が多く、受付が混雑する時間があった・配布冊子の原稿が遅くなり事務所への負担が大きかった・スタッフとしてじんかれんからの参加が少なかった。

(まとめ：石川)

2024年度 精神障害者家族相談員養成事業

NPO 法人じんかれん 研修会のお知らせ

《講演》 良い支援のために ～そもそもから整理する相談支援～



《講師》 湘南精神保健福祉士事務所 代表 長見 英知 氏

家族会の大きな役割として、家族による家族相談があります。良い支援を届けるために、長年、精神保健福祉士として活動をされている長見英知氏のお話をうかがいます。

- ♥ 日 時 2025 年 2 月 4 日 (火) 10 時 ~ 12 時
- ♥ 場 所 かながわ県民センター 304 会議 横浜駅西口 徒歩 5 分 よどばしカメラそば
- ♥ 参加費 無 料
- ♥ 定 員 60 人 (申し込みは不要です)

荒天等で中止する場合があります。

HP や事務所へお問い合わせください。



主 催 NPO 法人じんかれん

お問合せ NPO 法人じんかれん (事務所火・木 10:00~16:00)

電話 045-821-8796 FAX 045-821-8469

じんかれん家族相談のご案内

【家族電話相談】

◆研修を積んだ家族相談員による電話相談
毎週 水曜日 10 時~16 時 予約不要
※水曜日が祝日の場合でも大丈夫です。

☎ 045-821-8796

困っていること、悩んでいることなどお話し下さい。

【面接相談】

◆精神保健福祉専門家による面接相談
毎月 1 回 第 3 火曜日 13 時~16 時 要予約
※第 3 火曜日が祝日の場合でも大丈夫です。

相談場所：相模原市南区 3-3-2

ポーノ相模大野サウスモール 3 階

「ユニコムプラザさがみはら」

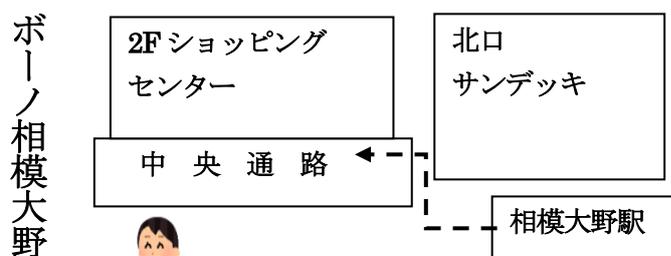
ミーティングルーム

予約電話：火・木曜日 10 時~16 時

☎ 045-821-8796

※相談料無料・相談内容は秘密厳守します。

『ユニコムプラザさがみはら』アクセス



3Fへ

3F

ユニコムプラザさがみはら

サウスモール
ショッピング
センター

小 車、北口
サンデッキより、ポーノ相模大野方面サウスモールに直進、中央通路の途中に「ポーノ横丁」の看板があります。左折してエスカレーターで3Fへ・・・
駅 改札口より徒歩3分